彦根市埋蔵文化財調査報告第27集

山崎山城跡発掘調査報告書

平成7年3月

彦根市教育委員会

序

彦根市は、琵琶湖東岸に位置する「城と湖のまち」で湖東地域の中核都市として発展してまいりました。「城」は、いうまでもなく彦根城でありますが、彦根市内にはこの他にも石田三成の居城として歴史に名を残す佐和山城跡やその実態は不明でありますが中世城郭跡が多数存在します。

彦根市は、湖南の市町に比べればそのペースは緩やかではありますが確実に開発が進んでおります。水道の第4次拡張計画もこれに対応し、給水区域を拡張するために策定されたものです。しかし、彦根市の南部はその大部分が田園地帯として開けた平野部で、配水池の適地は荒神山と今回発掘調査を実施した山崎山だけで、その地質的な条件から配水池は山崎山で計画されました。山崎山は、以前より山城があったことが知られていたところであり、また小字にも「古城」という地名が残っていることから、今回の発掘調査が実施される運びとなりました。

この発掘調査の結果、中世山城の良好な資料を得ました。「開発と遺跡保存」は常に古くて新しい問題であります。この問題をクリアーできるよう現在協議中であります。山崎山城跡の保存が可能となれば、滋賀県が提唱している「近江歴史回廊構想」の重要な拠点になるばかりでなく、江戸時代初期の大名の居城である「彦根城」・戦国時代の攻防の拠点である「佐和山城跡」・戦国時代の中規模な山城である「山崎山城跡」がそろうことになり、文字どおり「城のまち彦根」ということになります。

この発掘調査の報告書は、戦国時代末期の歴史を知る上で貴重な資料になると考えられ、本書が歴史研究の一助になれば幸いです。また、新たな彦根像を提供できればと考えるものです。

最後になりましたが、本調査にご協力とご支援をいただきました関係各位に対しまして謝意を表します。

平成7年3月

彦根市教育委員会

教育長　和田　豊治

例　　言

1．本書は、山崎山城跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査地番は、彦根市稲里町字古城３番地他である。

3．発掘調査は、彦根市水道部の委託を受けて彦根市教育委員会が実施した。

4．調査は、下記の体制で実施した。

平成４・５年度

彦根市教育委員会

生涯学習課長	川北　貢
同課長補佐兼文化財係長	日夏　秀喜
副主査	本田　修平
技師	清水　千恵

平成６年度

彦根市教育委員会

生涯学習課長	松田　一實
同課長補佐	日夏　秀喜
同文化財係長	成宮　誠
副主査	本田　修平
技師	清水　千恵

5．本調査には、次の方々が参加した。（敬称略）

平成４年度

石居すみ子	大堤須美子	鈴木　千代	高橋　弘幸	辰巳　三朗
出口加寿夫	西村　善吉	西村　惣助	古川　善一	古川　久

平成５年度

上田　昌利	大堤須美子	岡本　修	鈴木　千代	田邊　真希
出口加寿夫	出口美代子	西村　惣助	西村たけ子	西村　房子
林　利美	原　弥助	古川　久	古川　善一	森　秋男

平成６年度

上野　久雄	岡本　修	鈴木　千代	出口加寿夫	西村きぬえ
西村　昭三	西村　惣助	西村たけ子	西村富士雄	西村良太郎
林　利美	古川　善一	古川　久	森　秋男	

6．出土遺物等の資料は、彦根市教育委員会が保管している。

1．はじめに

山崎山城跡は、彦根市の稲里町・賀田山町・清崎町にまたがる比高50mほどの独立丘陵の東側の尾根に所在する中世山城跡である。遺跡が存在することは地元では広く知られていたもので、『愛知郡史』にも言及されている。ただし、その詳細については調査の手がおよんでいなかったため不明であった。

彦根市では、南部の開発の進展に伴い第４次の水道拡張計画を策定し、配水池の適地を調査していた。市南部の地理的条件は、愛知川と宇曽川が形成した沖積地が広がる平野部であり、配水池の高さを確保するためには荒神山か山崎山だけであり、山体の大きな荒神山は岩盤の風化が進んでおり地盤がやや弱く、山崎山が適地であるという調査結果であった。このため、水道部では用地の確保にはいった。また、同時期に建設部では西清崎の集落で急傾斜地の対策事業を計画していた。

山崎山には、山崎山城跡と国昌寺遺跡の２つの遺跡が知られていたが、上記した２つの工事計画があるために、滋賀県教育委員会文化財保護課と彦根市教育委員会の両者で現地の分布調査を実施した。この結果、国昌寺遺跡については山崎山西側の尾根上では確認できず、南側裾部に所在するという結論にいたった。しかし、山崎山城跡については、尾根線上にかなりの平坦部が認められることや最高部の西側に竪堀状の地形が認められること等から、城跡の可能性が確認できた。このため、予定どおり工事を計画する場合は、事前の調査を実施する必要があることを水道部に伝達した。

山崎山は、過去に崩壊を繰り返しているため土砂治山防備保安林の指定を受けており、上記の計画を実施する場合は用地の買収と共に保安林解除の事務手続きを行う必要があった。また、埋蔵文化財の事務手続きは、平成４年９月21日付け彦水工第787号で発掘通知および調査依頼の提出を受け、平成４年10月14日付け彦教委生第1440号で進達ならびに発掘調査通知を滋賀県教育委員会教育長あてに提出した。

その後、現地の試掘調査に入ったのは平成５年３月であった。

山崎山城跡の試掘調査は、山頂部の尾根に沿って立木等の状況から約100mの間にトレンチを４つに分けて、幅２mで設定した。また、このトレンチと直交するように尾根の両側に向けてトレンチを適宜設定した。この結果、土塁内側の石垣の基底部の根石と考えられる石列や尾根西側斜面の傾斜転換点のやや上側から地山の風化土をかなりの角度で成形した加工面が確認できた。また、尾根の南側斜面や東側斜面では、城跡の石垣の残存部分と考えられる１～３段の石垣および裏込めが確認できた。この他、土塁と考えられる山頂部西側の下で竪掘りの痕跡と考えられる窪みが尾根と直交するように両側

に落ち込んでいることも確認した。

この試掘調査の結果は、平成５年４月26日付け彦教委生第535号で水道部に報告すると共に、本調査が必要であることを伝えた。

その後、彦根市教育委員会と水道部で本調査についての協議を行った。また、年度をまたがったため発掘届および調査依頼を再度提出していただいた。発掘届ならびに調査依頼は、平成５年６月11日付け彦水工第578号で提出があり、平成５年６月28日付け彦教委生第929号で進達および発掘調査通知を県教育委員会教育長あてに提出した。

その後、発掘調査についての確認書は平成５年７月13日付けで締結した。

現地の発掘調査は、平成５年８月２日から実施し、平成６年３月31日で全ての作業を完了した。

この発掘調査の結果、山崎山城跡は、県下でも調査例が少ない非常に良好な遺構を残した中世山城跡であることが確認できたため、その保存について水道部と協議し、他の適地に配水池を設置することの可能性を探るため、平成６年度に山崎山の西側の尾根を試掘調査することになった。

このため、平成６年６月１日付け彦水工第441号で発掘通知および発掘調査依頼の提出を受け、平成６年６月14日付け彦教委生第747号で滋賀県教育委員会教育長あてに進達ならびに発掘調査通知を提出した。

これに伴う試掘調査は、平成６年６月１日～７月４日まで実施した。その後、資料整理作業を行った。

２．位置と環境

彦根市は、琵琶湖の東岸中央部の湖東地域の北端に位置する。琵琶湖を縁どるように形成された平野部の東端で霊仙山系からの山塊が琵琶湖に押し出されるように伸び、湖東地域と湖北地域の境を作っている。また、霊仙山と伊吹山が作る谷（旧中山道不破の関が所在する）は、近畿地方と東海地方を結ぶ数少ないルートの一つであるが、ここを通るルートは京都・大阪等の近畿地方中央部を結ぶ最短のルートとなるものである。彦根市は、その地形的なネックとなる所に位置している。このことは、現在でも東海道新幹線、ＪＲ琵琶湖線、名神高速道路等の東京と京都・大阪を結ぶ日本の主要な大動脈が集中していることからもうかがえる。彦根市は、マクロ的に見れば以上のように関西・西日本と中部地方以東の東日本を結ぶ地理的な条件を持っている。このような条件を考えれば彦根の地に佐和山城・彦根城が築城された理由も納得できる。

今回発掘調査を実施した山崎山城跡は、旧の郡名でいえば愛知郡と犬上郡の境に当た

り、彦根市南部の湖岸近くに所在する荒神山の南東側に位置する比高50mほどの小丘陵の山頂部に立地する。荒神山は、その湖岸側に曽根沼内湖を抱えた平野部に島状に浮かぶ独立した山丘であるが、山崎山もまた独立して存在する小丘陵である。荒神山は、火成岩の一種の石英斑岩から成る無火口の火山であるといわれ、山崎山も同様の地質を示す。この地域の平野部は、南側から愛知川・宇曽川・犬上川に囲まれた地域で、これらの河川が形成した沖積地である。山崎山・荒神山周辺にかかる直接的な沖積作用は、主に宇曽川によるもので肥沃な耕作地を作り、山崎山城跡を支える経済基盤であった。

山崎山山頂からは、琵琶湖の対岸に湖西比良山系の山並を望み、湖中の沖ノ島、長命寺山、観音寺山等が直線的に並び、その奥には布引山の丘陵が湖東地域の北と南側を画するように鈴鹿山系に向かって伸びる。

また、東南側は鈴鹿山系の御在所岳、釈迦ヶ岳、藤原岳等1,000m級の山が三重県との境を塞ぎ、鈴鹿山系の手前には旧愛知郡・犬上郡に属した集落が点在する。東から北側にかけては、霊仙山と伊吹山がそびえ、その手前には湖北地域東側の市・町の所在が俯瞰できる。以上のように、山崎山山頂からの見晴らしは非常にダイナミックなものがある。

山崎山周辺の地理的環境をもう少し詳しく以下に記す。秦荘町と湖東町の境の谷を発した宇曽川は、湖東平野を潤しながら北流して彦根市に至る。この宇曽川は、現在では河川改修が完了し、また宇曽川ダム等の治水工事で通常の水量は少なくなっているが、以前は荒れ川であったらしく度々氾濫をおこしていた。このことは、その流路に山崎山、荒神山が立ち塞がるという地形的な要因も多分にあったと考えられる。このように、宇曽川は山崎山にその行く手を阻まれ、「く」の字状に急激に屈曲しながら山崎山、荒神山の東側裾部を北流し琵琶湖へと達している。宇曽川は、その名前の由来が「運送川」からきたものといわれることもあるように、水量が豊富だった時代は琵琶湖から湖東地域内陸部への物資の輸送が盛んであった。

次に歴史的な交通関係について記せば、江戸時代には朝鮮人街道が湖岸線と並行するように湖東平野を通り、山崎山の裾部を西から北側を巻くように荒神山との間をぬけている。この時代の彦根には、中山道と朝鮮人街道が主要な街道として通っていたが、江戸時代以前は中山道の上街道に対して朝鮮人街道は下街道と呼ばれ、この下街道は織田信長が岐阜より安土を通って京にいたる道として整備したといわれるものである。このように、山崎山城跡は、前面に下街道をひかえ、北から東、南側を宇曽川が遮るという要害の地、また交通の要所である地形的な条件を備えていた地に立地していたことがうかがえる。

次に、山崎山周辺の歴史的環境について遺跡を中心に述べたい。

宇曽川は、過去にかなりの荒れ川であったといわれ、このためにその流路を度々変えていた。宇曽川の河川改修時に県文化財保護課が実施した妙楽寺遺跡の発掘調査は、現行の河川敷の中でのものであり、流路の変化により集落の跡地が河川になったものである。この遺跡は、弥生時代前期後半の遺物を出土した土坑等を検出し、その後時間的な断続はあるものの、中世末まで続く複合遺跡である。また、弥生時代中期の遺跡としては、山崎山から東へ約２ｋｍの所に馬場遺跡があり、掘立柱建物跡だけで構成された集落跡が確認できており、この時代の集落跡としては特徴的な遺跡である。宇曽川流域の遺跡では、壺・甕・水差しのセットが土壙状の遺構から出土した肥田西遺跡等も挙げられるが、この時代については調査例が極めて少ないため詳細は不明である。

古墳時代の遺跡は、各所で確認できるようになるが、古墳時代前期の遺物が出土している遺跡は妙楽寺遺跡やこの妙楽寺遺跡の南側に隣接する蛭目遺跡がある。また、荒神山一帯にはいわゆる後期群集墳が25基確認できており、延寿寺裏の古墳からは馬具も出土したといわれている。この他、荒神山の林道建設工事時に出土した遺物が稲枝東小学校に保管されている。

宇曽川を中心にした古墳時代以降の歴史は、山崎山から西に約1.5ｋｍの上岡部町の屋中寺廃寺遺跡で白鳳時代の瓦や柱根等が耕地整理の時に出土しており、稲枝北小学校に保管されている。また、この屋中寺廃寺から約２ｋｍ西側の普光寺町でも同時代の瓦を出土する普光寺廃寺が存在する。このことは、二つの政治的なまとまりが有ったことを示している。この時代の集落跡は、まだ明確ではないが愛知川の自然堤防上に立地するものと考えられる。

中世の集落跡は、宇曽川の改修時に発掘調査が行われた妙楽寺遺跡や廃棄物の投棄場建設時に発掘調査を実施した古屋敷遺跡があげられる。両遺跡は、宇曽川をはさんで両岸に位置する遺跡であるが、両遺跡ともに溝・道状の遺構等で区切られた屋敷跡を示すものであった。これらの遺跡は、荒神山北端から東に向かって張り出した尾根に所在したといわれる日夏城跡に関連する集落跡と考えられる。また、現在の日夏の集落の前身といわれている。

以上のように、山崎山周辺の歴史的環境を見るならば、荒神山はこの付近のシンボル的な役割を果たしていたと考えられる。このことの証が後期群集墳の存在であろう。また、交通としては、当然琵琶湖の湖上交通が考えられるが、この他宇曽川の輸送力や織田信長が整備したといわれる「下街道」およびその前身の道が考えられる。山崎山城跡は、この「下街道」と宇曽川の水運を押さえる交通の要衝であったことがわかる。

3．調査結果

山崎山は、山頂へ登る山道もなく、ブッシュおよび立木が茂った状態であった。このため、発掘調査にかかる以前の作業として、ブッシュを切り開き立木の伐採から行わねばならなかった。また、抜根は、掘り込み作業の進展に伴い順次行ったが、これらの作業にかなりの労力をとられた。さらに、現地は保安林である関係から、調査区域の一段下に土を止めるための柵を設置した。

山崎山城跡は、試掘調査の結果、各トレンチで地山の成形面や石垣および裏込め等が確認でき、この時代の中世山城のプランが良好な形で保存されている可能性が確認できたため、東側の尾根全体を発掘調査の範囲とし、畦を残して各部分にトレンチを設定する計画とした。トレンチは、結果的に試掘調査で設定したものも含めて19箇所になった。

以下、各トレンチの調査状況を記す。

1トレンチ

1トレンチは、試掘調査時に幅1m・長さ27mの大きさで山崎山の最高点から尾根に沿って設定したものである。試掘調査の時点では、すぐ北側の荒神山には後期群集墳が存在することから山崎山の最高点でも、その形状から径10mほどの古墳の可能性も考えられたためである。

試掘調査の結果、トレンチ北側半分で2箇所の1段～2段の石垣の基底部と考えられる石列を検出した。このうち、北側の石列は、南側を面にして石垣の裏に50cm前後の幅で角礫の入った層が確認できた。また、トレンチ北側から中央部にかけて確認できた石列は、西側を面にするもので、この石列の裏側にも角礫の層が確認できた。これらの石列に使われている石は一辺50～70cmのものが大半を占めている。

このトレンチの土層は、表土の腐食土層が40cmで、第2層は石列と石列の間が角礫の入った黄褐色の山土（地山の岩が風化してできた土）層であったが、その堆積の状態は、角礫の間の土が詰まっておらず空洞が目立つ状態であった。このことは、この堆積が自然の状態でなされたものではなく、一時期に埋まった状態、言い替えれば人工的に埋められた状態を示すものと考えられる。

トレンチ南側では、表土層が20cmほどで、第2層が赤褐色粘質土層になり、40cm×30cmの偏平な石が水平に据えられた状態で検出できた。また、この南側では、前述した第2層は薄くなるが、地山の岩を掘り窪めた長径70cm・深さ20cmの楕円形のピットを検出した。この状態からトレンチを拡張すれば建物の遺構が確認できる期待をいだかせた。

2トレンチ

1トレンチの延長として試掘調査時に1m×17mの大きさで設定したもので、基本的な土層は1トレンチ南側と大きな違いはなく、5cmほどの表土の下に第2層の黄褐色山土層が20cmほどの厚さで確認できた。この層からは、土師質の小皿が若干出土した。このトレンチでは、ピット等の遺構は確認できず、地山の岩はほぼ平坦であった。

3トレンチ

立木の関係で若干のずれはあるが、2トレンチの延長として幅1m×長さ20.5mの規模で設定したトレンチである。地形は、東に向かって舌状に張り出す尾根の先端に近くなることから緩やかな斜面になっていた。表土層は、東側に向かうほど薄くなり、斜面では地山の風化した層が表土層になるような状態であった。トレンチ北側では、角礫層が2mほどの幅であり、その南側は、1mの幅で急激に落ち込んで段が1段作られた状態であった。これから尾根の先端部に近い側では、地山の岩になっていた。前述した落ち込みは、1トレンチの石列間の状態と同様の土層で、角礫の間が空洞になっているところが多かった。このことから、1トレンチと同様に人工的に埋められた可能性が考えられる。

以上の3箇所が平成4年度の試掘調査時に設定したトレンチのうちの残存である。

この試掘調査で確認できた山崎山の地形は、山崎山最高地点より尾根は先端部に向かって緩く傾斜し、先端部は斜面の傾斜が急になっている。また、舌状に伸びる尾根の先端部の地山は比較的固い岩が露出していたが、尾根の西側に行くほど風化が進み比較的柔らかな粘土に近い土に変化し、一部では山土化した所も確認できている。また、傾斜面も同様の変化を示すが、相対的には北側の斜面が風化の進んだ岩であり、南側の斜面は山土化したものであった。このことと遺構の残存状態を考え併せれば、北側斜面は山自体の崩壊が進み比較的固い岩で現状を維持していると考えられ、その傾斜もかなり急であった。これに対し南側斜面は、傾斜がかなり緩やかで風化が進んだ地山でも全体的な崩壊は起こしていないものと考えられる。

5トレンチ

5トレンチは、山崎山が宇曽川に向かって伸びる舌状の尾根の先端部に設定したもので、試掘調査時に石垣の残存が部分的に確認できた地点の一つである。

石垣は、尾根の先端部を区切るように「コ」の字状に積まれ、東側と北側で途切れているが、南側で8m、東側は10m石垣が残存していた。北側は、「鍵の手」状に折れ曲

がり、4.5mの長さで残存していた。この石垣が山崎山城跡の最東端の施設になるものと考えられた。

石垣は、地形に沿いながら「野石乱層積み」されたもので、保存状態の良いところで4段の石垣（高さ約1.2m）を確認している。また、石垣が崩壊した所でその構造が確認できたものであるが、石垣基底部は地山の岩を根切りして幅50cmほどの段を造り、20cm弱の偏平な石を根石基礎として並べ、その上に根石を積む工法であった。ただし、根石基礎は根石全面にわたって施されているものではなく、根石の形状によるものと考えられる。また、石垣の裏面には人頭大の角礫が裏込めとして入れられていた。地山の成形は、根切りだけではなく、裏込めを入れるため尾根の傾斜転換点から地山を成形し、斜面を造っていた。この斜面と石垣の間に前述した人頭大の角礫を裏込めとして入れていたもので、裏込めの傾斜は彦根城の石垣と比較すればかなり緩やかである。

石垣は、裏込めの状態から考えればその高さは少なくとも尾根を覆うぐらいまではあったと考えられ、全体に尾根先端に向かって傾斜していた可能性はあるにしても郭の平坦部は確保していたものと考えられる。

N－0トレンチ

比較的に風化の進んだ岩が主体の場所で、尾根上は表土層もほとんどなかった。このため、石垣は崩壊したと考えられるが、4トレンチの「鍵の手」状に残っていた石垣の根切りの続きと考えられる段が確認できた。すなわち、地山の岩を2段の階段状に成形したもので、50cmの幅の根切りおよび裏込めのための成形の痕跡と考えられる。

また、斜面に堆積した土層は、一辺50cm前後の石を含んでおり、石垣および尾根平坦部の整地層が斜面に堆積したものと考えられる。

N－1トレンチ

東に向かって張り出す「舌状」の尾根の幅が最大になる部分に設定したトレンチである。北側の斜面部分は急角度であり、立つことも困難な程の斜面であった。また、地形的にもかなり深く内側にえぐれており、過去に崩壊した地形の典型であると考えられた。遺構は、トレンチ西端の尾根鞍部で幅（東西方向）3m・長さ（南北方向）4.5mの敷石遺構が確認できている。その状態は、敷石遺構の東側の石列の保存状態があまり良くないが、比較的大きな（一辺60cm前後）石が並べられてあり、東側に向いて面をそろえていた。

敷石遺構は、東側尾根より約1m高い段に作られており、上の郭と下の郭の区切りの遺構であると考えられる。この敷石遺構の下の郭は、東側石垣まで同一の郭と考えられ

るが、その地形は東に向かって傾斜しながら続き、結果的には尾根線上で比高が３ｍほど下がる。このことから考えれば、この郭で平坦部を確保しようとすれば、石垣の高さが最低でも３ｍほどの高さを復元できるが、石垣をある程度の高さで腰巻き状に尾根の裾を巻いていた可能性も考えられる。

このトレンチの斜面は、傾斜が急であり石垣の残存は確認できなかった。

Ｎ－２トレンチ

尾根鞍部の平坦面は、Ｎ－１トレンチで確認した敷石遺構とほぼ同様の幅を持つ平坦部が広がり、北側斜面は平坦部端から急激に落ち込む。この傾斜部分は、かなり人工的に成形した面を持っていることから、裏込めのための地山の成形面と考えられるが、裏込めの石等は確認できなかった。このことから、この地点でも外郭の石垣は崩壊しているものと考えられる。

Ｎ－３トレンチ

尾根鞍部の平坦面は、トレンチ中央部で段が１段（比高で50cmほど）造られている。しかし、Ｎ－１トレンチで確認できたような郭を区画するような施設は確認できていない。このことから、中間に段を持つ一つの郭と考えている。面積的には、山崎山城跡で一番広い郭である。

北側斜面は、Ｎ－２トレンチから続く地山の成形面を確認しているが、斜面は地山の風化が進んだ岩が直接露頭しており、石垣は崩壊しているものと考えられる。

Ｎ－４トレンチ

このトレンチでは、石垣の基底部の残存と考えられる石列が２ヶ所確認できている。このうちの一ヶ所は、トレンチの中央部付近で確認できた斜面の等高線と直交するように組まれたもので、北西側を面とするものである。この石組は、斜面に組まれたため残存状況があまり良くなく１ｍほどしか検出できなかった。また、他の石組はトレンチ西端で確認したもので、南側を面にして約５ｍ残存していた。この石組の内（尾根）側には、面を西側にした石組が確認できており、Ｎ－４トレンチのものとセットになり幅４ｍの石垣になると考えられる。これは、石組の間に割石が裏込め状に入っていたことからもうかがえ、ある程度高さを持ったものであると考えている。

Ｎ－５トレンチ

山崎山最高地点の北東側に設定したトレンチで、Ｎ－１トレンチからＮ－５トレンチ

にかけての現況の地形は弱く内弯しており、過去に大規模な地崩れが起きたことが見て取れる。このため、尾根上の平坦部は狭く斜面は急であり、作業は困難を極めた。このトレンチでの遺構は、石列が３ヶ所確認できており、ごく一部の保存状態が良いところで２段残存していた以外は１段であり、いずれも石垣の基底部の根石だけが残存しているものと考えている。トレンチ北側で東西方向に伸びる石列は、１トレンチからＳ－１トレンチまで伸びるもので現状で11m確認できており、城郭の北側を画する土塁の石垣である。石列の面は南を向き、比較的大きな石を使って組まれていた。この石組とほぼ直交して南北に走る石組がトレンチ西側で検出でき、その面は西側で全長が現状で10m確認している。また、この石組よりやや東に角度を北側に振り等高線と並行する石垣が約４ｍ検出できたが、これより下は自然崩壊したものと考えられる。この石組の面は西側を向くことから、本来はこの石組と対応するものが外側にあったと考えられる。この地点の土塁の構造は、郭の内側に犬走りもしくは２重の石垣を持つものであったことが考えられる。

Ｓ－１トレンチ

Ｓ－１トレンチは、Ｎ－１トレンチの尾根の反対側に設定したもので、１トレンチで確認した石列の続きを検出することを主目的にしたものである。石列は、この地点の尾根に対してやや西側に振って造られた石垣の根石石組を確認した。この石列は比較的大きな石を使っており、Ｎ－１トレンチからの全長で１１ｍを計る。また、この石列から地形に沿った形で尾根側に面を向けた石列を検出した。この石列は、Ｓ－１トレンチの幅いっぱいの所で検出したが、隣のＳ－２トレンチでは確認できていない。このことを現状の地形から考えれば、斜面が尾根側にえぐれており、自然崩壊していることが考えられ、現状で4.2m確認している。この石列は、対になるものが外側にあり、石垣を造っていたものと考えられる。

Ｓ－２トレンチ

Ｓ－１トレンチで検出した尾根と並行する石列を確認するために設定したトレンチであるが、現状の地形が内弯してえぐられた形を成していることから、斜面は自然崩壊したものと考えられる。ただし、このトレンチでは３石だけではあるが、土塁と並行し面を南側にした石列を確認した。この石列と土塁の石列の間には裏込めに使っていたと考えられる角礫が多量に入っており、堆積の状態は１トレンチで確認したような空洞の多い人工的に埋められたと考えられる状態であった。

Ｓ－３トレンチ

南側斜面は、尾根に沿って若干張り出し気味に広がる地形を成している。このトレンチでもＳ－１トレンチで確認した石列の続きを確認することとしたが、この地点も自然崩壊の結果、石列は既に崩壊しているものと思われ、確認できなかった。ただし、トレンチ北端では土塁石列とほぼ並行して面を南に向けた石列を４ｍほど検出した。また、この石列よりトレンチの中央部に近い所でも若干動いた形跡はあるが、６石だけではあるが面を南側に向けた石列を確認している。

以上のように、Ｎ－４・Ｎ－５・Ｓ－１・Ｓ－２・Ｓ－３の各トレンチで確認できた石列から、この地域は尾根線上の平坦部を石垣で補強した土塁（もしくは石垣）で三方を守られた台形の「枡形」を形成していたものと考えられる。この「枡形」と次の郭との連結部は石列の残存状況から考えれば階段状を成していたものと思われる。現時点では、一応この「枡形」状の遺構を第一郭と考えている。

Ｓ－４トレンチ

東側に向かって伸びる尾根のほぼ中央部に設定したトレンチで、地山は風化して粘土化したもので、部分的には地山の岩が露頭するところがある。地形は、第一郭から緩やかに下がる平坦地に近い斜面を成しているが、トレンチ中央部で弱い段が作られている。また、斜面は風化して形成された粘土に近い岩を丁寧に削って成形した痕跡を確認した。これは、築城時に地山を成形して石垣の裏込めを入れた痕跡と考えられる。

トレンチ西端の傾斜転換点の上側で、偏平な石を「コ」の字形に並べた炉跡を検出したが、表土面に露出していたもので古いものとは考えられない。

Ｓ－５トレンチ

北から南へと伸びる尾根が、やや東へと振る付け根部に設定したトレンチで、尾根上の平坦部の面積が最大となる地点である。トレンチ南西側斜面では、Ｓ－４トレンチで確認した尾根線鞍部から斜面へと変わる傾斜転換点から下で地山を成形したきれいな成形面を確認した。また、トレンチ東側では、２段前後の石垣が南西側を面にして残存しており、地山の成形面には裏込めの角礫が確認できた。この石垣は、極一部が部分的に露出していたもので、石垣は試掘調査で確認していたものである。

トレンチ西側では、裏込めの角礫は確認できているが、石垣は検出していない。裏込めの状況から見れば裏込め全体が下にずり落ちている可能性が考えられる。この状態から考えれば、西側の石垣はすでに崩壊したものと思われる。

Ｓ－６トレンチ

Ｓ－６トレンチは、Ｓ－５トレンチで確認できた山城の外郭を示す石垣がまとまって検出できる可能性が考えられた。石垣は、Ｓ－５トレンチと同様、地山を傾斜転換点から成形し、この斜面の下に幅５０cmほどの段を作り石垣基底部の基礎としている。この上に、現状の保存状態の良いところで四段、約１．２ｍの石垣が地形に沿った形で築かれていた。このトレンチの石垣は、裏込め等の保存状態が一番良い所で、石垣の基底部より約３ｍにわたり残存しており、石垣は最低でもこの高さまではあったものと考えられる。ただし、トレンチ東端で石垣は確認できなかったことから、すでに一部は崩壊（もしくは人工的に崩された）していた。

また、トレンチ北端ではＮ－１トレンチで検出した敷石遺構の続きが幅２．５ｍ長さ０．８ｍで確認できた。このトレンチでの敷石遺構の幅が若干狭いのは、敷石遺構を区画する外郭の石が残存していなかったためであるが、現状で確認できた敷石遺構は最大幅３ｍで全長８．５ｍであった。この敷石遺構が尾根中央部を直角に区切るように確認でき、この南側でこの遺構と並行するように平に据えられた偏平な石が１ｍの間隔で２個検出できている。両者の位置関係から見れば、関連した遺構と見ることも可能であるが、現時点では敷石遺構の性格が不明であるため、遺構の存在だけを報告しておきたい。

Ｓ－７トレンチ

第３郭中央部の南斜面に設定したトレンチで、地形的には尾根が舌状に伸びて曲線を描く地点に位置している。傾斜部では、地山で幅２ｍほどの段が２段確認でき、この中間の段に地山から掘り込んでいる径１～0.7m・深さ１ｍのピットが３箇所検出できた。

また、トレンチ東端では石垣の根石が３石出土し、畦へと潜り込んでおり、４トレンチの石垣とつながるものと考えられる。検出できた石垣の端の石は、奥向きに長く据えてあったことから考えれば、この地点で石垣が一旦切れていた可能性も考えられるが、現状では可能性の指摘でけに止めたい。しかし、この城跡は南から一直線に「下街道」が通っていたことを考えれば、その地理的条件から南向きに造られた山城であった可能性が強いため、この地点に矢倉や門等の城郭施設を考えることも可能であろう。

Ｓ－０トレンチ

山崎山は、西側の尾根が最高地点から比高で５ｍほど急激に下がる地形をしている。この下がりきった所は、「馬の背状」の狭い地形をしているが、尾根線と直交する「竪堀」状の落ち込みを２箇所確認した。この「竪堀」状の落ち込みを確認するためＳ－０トレンチとＮ－６トレンチの２本のトレンチを設定した。Ｓ－０トレンチは、山崎山最

高地点の北側斜面の西側に設定したトレンチである。トレンチは、最高点北側斜面から「竪堀」状落ち込みを越え平坦部尾根までの直線で11mの長さになった。

北西斜面上部では、石垣の根石が１段から２段検出でき、裏込めの角礫も確認できている。この石垣の保存状態はＮ－６トレンチに比べて若干悪いが、石垣根石の下には地山を成形して弱い「Ｕ」字状の窪みをつくり、石垣根石の押さえのために山土を埋め、「犬走り」状の平坦部を１ｍ造る。「竪堀」は、トレンチを設定した地点で幅６ｍ、深さは現地表面から１ｍを計る。この「竪堀」の断面は「Ｕ」字形をなし、地山の岩を成形したもので、地山面からの深さは1.8m以上であったと考えられる。また、石垣根石からの比高は2.7mであった。

Ｎ－６トレンチ

Ｎ－６トレンチは、最高点北側斜面の北端部に11mの長さで設定したトレンチである。このトレンチでは、２段から３段のしっかりした石垣が検出でき、裏込めの角礫もＳ－０トレンチ同様確認できた。石垣根石下の段は「犬走り」状に幅1.3mを計り、「竪堀」の断面はやや不整形な「Ｕ」字状をなし、幅は現状で８ｍ、深さは現地表面から1.8mを計る。石垣根石から「竪堀」底までの比高は４ｍを計り、かなりの深さを持つものであった。

また、地山の成形は石垣の側だけではなく、「竪堀」の対岸でも非常に丁寧な整形がなされていた。

Ｓ－０・Ｎ－６トレンチで確認した堀を「竪堀」とした理由は、現況の地形が尾根中央部で幅１ｍ弱の陸橋状の掘り残しを確認しているためで、「堀切」として尾根を切っていないことから「竪堀」と考えている。この陸橋状の掘り残しは尾根線からやや東を向いて残されていることから見れば、Ｎ－６トレンチで確認した「犬走り」につながる通路を成していた可能性もある。

平成６年度試掘調査

以上のように、平成５年度の発掘調査では非常に良好な中世山城の遺構を確認したため、遺跡の保存がクローズアップされることになった。このため、他の場所に配水池設置場所の可能性を検討するため、平成６年度に城郭を確認した場所の西側の尾根で試掘調査を実施した。

調査場所は、山崎山中央部の一段低い「馬の背」状の尾根で、地形的には昨年度の調査で確認した竪堀の西側に当たり、山城の正面が尾根に沿って北町側とすれば「虎口」

が所在する可能性が考えられた。このため、調査は尾根および尾根から続く斜面を中心にトレンチを設定し、遺構の有無を確認することとした。遺構が確認できた場合は、可能な限りトレンチを拡張して遺構の性格を把握する計画としたが、結果的には試掘トレンチを17箇所設定するにとどまった。

以下に試掘調査の結果について記す。

全体の土層は、10cm前後の表土を取り去ると地山の岩が出てくる所が大半であるが、西端の尾根から斜面にかけては、岩の風化した真砂土が確認しただけで1.5mの厚さで堆積していた。ここは、山崎山西端の土取り場になっている尾根とのつなぎの部分に当たり、10m程の比高があるかなり急な斜面であった。

尾根線上には3箇所のトレンチを設定したが、東側の2箇所のトレンチで地山に掘られた幅30cm・深さ50cmの断面「L」字状の溝を長さ32mにわたって検出した。この溝は、しっかりと作られたもので、掘削面が風化した形跡は全くなかったが、尾根と並行して走り、東端部で方向をやや東に振って尾根線に接近して切れていた。

また、北側斜面の西端部に設定したトレンチでは、人工的に成形されたと思われるかなり緩やかな斜面が確認できている。この地点は、尾根が北に向かって張り出しているところで、西清崎の集落のすぐ裏まで続いており、山城の登り口の一つであった可能性が考えられるが、城郭と考えられる遺構は確認できていない。この他の北側斜面に設定したトレンチでは、薄い表土のすぐ下で地山の岩になることや、斜面も急角度であることから、斜面の崩壊により現在の地形が形成されたと考えられ、遺構の確認はできなかった。

尾根の南側斜面西端部に設定したトレンチでは、地山の岩を半円形に成形した掘り込みが3段確認できた。また、南側斜面に設定したトレンチでは、地山の岩を2段の階段状に成形したものを確認している。

山崎の集落には、明治時代初期に山の裾部にあった日吉神社が大規模な山崩れで埋まったため、稲村神社に合祠したとの記録があり、国昌寺裏山の中腹部には昭和30年代に杉・檜を植林したことを記念する石碑が立っている。さらに、この南側斜面には人頭大の石を高さ1m程積んだ土砂止めの石垣が多数見られる。これ等のことから、南側斜面で確認できた半円形の掘り込みや階段状の成形は、砂防のための工事もしくは植林に関係するものと考えられる。特に、斜面で確認できた階段状のものは、柵を作りながら土砂の流失を止め、植林する手法のために作られた段であると思われる。

以上、今回の試掘調査では城郭主要部分に対応するような「虎口」や郭・堀等の明確な城郭の遺構は確認できなかった。また、現状の地形は砂防工事や植林事業のために近代になってから作られたものであると考えられる。

4．まとめ

山崎山城跡は、山崎山東側尾根で中世の山城の良好な遺構が確認できた。ただし、石垣は各トレンチの結果報告の章のとおり、一番最初は人為的な廃棄により、またその後は自然崩壊により完全な遺構の検出はできていない。また、尾根平坦部に存在が予想された山城に関係する建物跡は、城郭部の整地層がかなりの部分で削平もしくは崩壊していたためにほとんど確認できなかった。このことは、斜面に堆積した山土・粘質土層で土師質の小皿の破片が出土しており、尾根平坦部の整地面の土が斜面に落ち込んで堆積しているものと考えられるものである。以下に、平成４年度から平成６年度までの調査結果をまとめ、山崎山城跡の「縄張り」等について記述したい。

《第一郭》

Ｎ－４・Ｎ－５・Ｓ－１・Ｓ－２・Ｓ－３およびＮ－６・Ｓ－０の各トレンチで検出した石垣等を復元すると、石垣で区切られた方形の郭が浮かび上がってくる。

第一郭の最初の防御施設は、尾根を塞ぐように構築された両側を石垣で覆われた土塁（もしくは石垣）で、現状で幅７ｍ・長さ１３ｍを計るもので、両側の石垣には角礫が裏込めされていた。ただし、両側の石垣は保存状態が一番良いところで３段だけの残存であり、大半の部分は一段だけで基底部を石垣で固めた土塁なのか完全な石垣が構築されていたのかは現状では確認できない。この石垣に対応して第一郭を形成する遺構は、南斜面・北斜面ともに石組は内側（郭の内部側）を向いた面を持っており、この外側に外向きの石垣が築造されており土塁（石垣で基礎を固めていた）もしくは石垣で方形の区画が作られていたものと考えられる。その大きさは、ほぼ１１ｍ×９ｍであるが、東側は石組で作られた３段の階段状の遺構で終わっている。第一郭がこの階段状遺構の３段目までとすれば１１ｍ×１３．５ｍの大きさになる。

以上のことから考えれば、第一郭は石垣もしくは土塁で「コ」の字状に囲まれた「枡形」を成す郭であったことが考えられる。

《第二郭》

尾根のほぼ中央部に所在するもので、Ｎ－２・Ｎ－３・Ｓ－４・Ｓ－５の各トレンチを中心とし、この他にＮ－１・Ｎ－４・Ｓ－３・Ｓ－６トレンチの一部が含まれる。第二郭は、城跡が所在する尾根で一番幅があるところで１６ｍの幅を持つ。また、長さは３５ｍを計るが、第二郭は同一の平坦面ではなく第一郭から約１２ｍの所で０．５ｍほ

どの段が作られ、東側が１段低くなっていた。

城郭の施設としては、南側斜面の東側半分で石垣および裏込め石が検出できているが、西側に行くほど全体に傾斜の下の方にずり落ちた状態であったことから見れば、西側は自然崩壊しているものと考えられる。また、北側斜面は尾根上平坦部の整地層の土が厚く堆積しており、地山の岩を階段状に成形した跡が一部確認できていることから、石垣が築造されていたが既に崩壊しているものと考えられる。この第二郭と第三郭の区切りは、Ｎ－１・Ｓ－５トレンチで検出した敷石遺構であると考える。敷石遺構は、外縁部を人頭大の石で囲み北側および南側はやや遺存状態が悪いが現状で７．５ｍ×３ｍを計る長方形を成すものであった。その形態は、縁石の石組の中に角礫が敷かれた状態で検出したもので、石垣の基底部だけが残された可能性が考えられる。また、南側に接する形で偏平な石が２石据えられた状態で確認できたことから、建物の礎石であった可能性も考えられるが、石垣もしくは土塁遺構の基礎となるものと考えるのが一番自然であろう。

《第三郭》

第三郭は、尾根東端に構築された郭で、Ｎ－０・Ｎ－１・Ｓ－６・Ｓ－７・４の各トレンチで検出できた遺構から構成されている。この地域の尾根は、表土の腐食土層が５cm前後の厚さでほとんど表土の無い所もあり、この層の直下はすぐに岩となるもので、地形は第二郭との区切りの敷石遺構から１段下がり、この面から平面の距離が30mで５ｍ下がる傾斜であった。また、「舌」状の尾根の先端部に位置する地形的な制約から平面のプランが極端な「台形」状になっていた。

石垣は、南側斜面から東側斜面を囲み、北側斜面の一部まで残存していた。山崎山城跡の立地する尾根は、全体的に見れば「へ」の字状に南に向かって弱く折れ、この折れた地点が第二郭と第三郭の接点で、城の外郭を示す南側斜面の石垣はＳ－６トレンチで地形に沿って「へ」の字状に角度をつけて造られていたが、石垣はトレンチ東端で一旦途切れ、この途切れた部分は現状の他の石垣の残存状態から見れば既に崩壊しているものと考えられる。

城の城郭を示す外郭の石垣は、Ｓ－７トレンチで再び確認できるようになる。このトレンチでは、遺構面の大半が地山を階段状に成形した遺構で、成形面の段には径１ｍ前後・深さ１ｍのピットが３箇所確認できており、柵もしくは門状の施設があった可能性が考えられるが、地山の段状の成形は他の石垣が確認できている部分のそれと同様であり、柵状遺構とするには手がかりが乏しいため可能性の指摘だけに止めたい。また、城郭を区画する石垣は、このトレンチの東端でその始まりが確認でき、その状態は等高線

と直交するように奥に長い石を積み、石垣の始まりを示すような状態であったが、やや小さい石が２石だけの残存であり、確証に乏しい。

尾根先端の石垣は、東に向かって張り出す尾根の地形に沿って造られ、一部は既に崩壊して確認できないところもあるが、保存状態の良いところでは４段・1.1mの高さを計る。石垣南端の角は、石がやや浮いているが奥行きのある石を井桁積みにし、尾根先端部は土の被りが少なく保存状態がやや悪いが１～２段の石垣が残存していた。また、石垣東端角は１石しか残っていなかったため、石の積み方は不明であるが、角を作り北斜面に折れている。北斜面の石垣は、積み石も大きなものではないが「折曲」状に作られた石垣を残しており、防御のための構造が見られる。

以上のように、第三郭は尾根の先端部に位置する関係から、また周囲からも良く見えるため、石垣は丁寧に造られていた。全体の地形から見れば、宇曽川が第三郭のすぐ下を流れており、山城外郭の堀の役割を果たしていたことが考えられる。

《石垣》

山崎山城跡は、その所在する尾根の西・南・東側で城郭の輪郭を示す石垣が確認されると共に、石垣の存在で各郭が明確に押さえられ、中世山城の一つの形態を知る貴重な資料である。また、今回の調査では石垣の構造が明確に把握された。以下に、この石垣の構造について述べる。

石垣は、積みの技法からは「空積み」といわれるもので、使用していた石の種類やその積み方を見れば自然石を不規則に積み重ねる「野石乱層積み」の技法で積まれていた。また、石垣の基底部の根石の据え方は、特別に胴木や杭で基礎を固めるものではなく、地山を成形し50cm前後の段を造り直接根石を据えるもので、根石の勾配や面を調整するための偏平な割石をかませていた。

石垣の裏込めは、尾根の表面や輪郭を成形した工程で出て来る岩（すくなくとも山崎山産の石）で角礫が主でこの他岩の風化土も使用していた。このため、「裏込め」部分は小さな空洞が多くなっていた。

石垣の残存状況は、基底部の根石だけを残すところや基底部の根石から３・４段までの石積みを残しているところ等があるが、残存している石垣でも上半分は全て残存していなっかたことや崩壊して堆積した所の土層の状態から石垣は人為的に崩されたものと考えられる状態であった。その後、部分的に自然崩壊が加わったものと考えられる。

《竪堀》

竪堀は、第一郭の西北端の尾根を横断して造られた土塁（石垣）と対になり城郭の防

御施設として機能したものと考えられる。その形状や堆積した土層から見れば、「空堀」であったことが確認できた。堀の底と現地表面は1.8mから１mと浅いものであるが、土塁の石垣の根石からの比高は４mを計り、少ない労力で防御力を高めるために地形を最大に生かした構造になっていた。

《遺物》

今回の発掘調査で出土した遺物は、生活の痕跡を示す日常雑器の出土はほとんど見られず、極限られた器種であった。その大半は土師質の素焼きの小皿で、タイプ的には２種類のものが確認できている。一つは、偏平な丸底を持ち内弯ぎみに立ち上がる口縁を持つ通常の小皿であった。他のタイプは、小さく作られた底部の中心部を裏から窪めるいわゆる「へそ皿」といわれるもので口縁部が肥厚ぎみに外傾して収まるもので、このタイプの終わりに近いものである。これらの遺物の出土は少なく、尾根の平坦部では数えられる程度のものであった。出土遺物の大半は、斜面に溜まった堆積土層からの出土であり、２次的な包含層ということができる。すなわち、尾根平坦部の整地層の土が斜面に堆積したものと考えられる。

今回の発掘調査では、以上の城郭施設が検出でき、連郭式の山城であることが確認できた。この山崎山城跡の全体の規模は、尾根の最大幅20m・全長100mを計る、中規模な城郭である。

中世城郭と一括される遺跡ではあるが、その内容は築城する武士集団の規模により城郭に違いが表れるのは当然のことである。観音寺城跡のような守護大名の居城、小谷城跡のような戦国大名の居城は大規模な城構えを持つものである。これに対し、山崎山城跡は在地を支配する土豪の山城と位置付けることが可能であろう。また、館に堀や土塁等の施設を設け城郭化した比較的小規模なもの等に分けることができるだをう。

このように、遺跡（城郭）から地域の様相を考えることも可能である。以下に、山崎山城跡を取り巻く状況を見てみたい。

山崎山は、比高50mほどの小さな独立丘陵で、北西（湖岸）側に標高262m（比高170m）で琵琶湖側に曽根沼内湖を持つ荒神山が存在し、南東側には標高115m（比高20m）の茂賀山があり、湖岸線に直交するように三つの独立丘陵が並ぶ。また、この三つの丘陵には山崎山だけでなく山城が築城されていたといわれる。このことは、山崎山城跡を築城した土豪が、山崎山にしか築城できなかったことを物語っており、その勢力範囲が荒神山と茂賀山の間の極めて限られた範囲であったことがわかる。

滋賀県教育委員会が1987年に出版した「滋賀県中世城郭分布調査５」によると、彦根

市内には67箇所の城郭や館が挙げられている。これらの城郭にはそれぞれの築城された時期があり同時代に並立しているものではないが、中世の彦根市域は小土豪が割拠する状態であったことが中世城郭の分布状態から見て取れる。「彦根市史」に記述のある佐和山城を軸にした六角氏と京極氏の攻防は、上記のことが背景となって起こった１つの史実であると考える。

彦根地域が政治的に安定（統一）するのは、織田信長が近江に入ってからである。信長の近江支配は、六角氏・浅井氏という有力大名を滅ぼし、在地の土豪を配下に組み入れることで確立した。この過程で、山崎山城を築城した山崎氏の名も「信長公記」にその名が見える。また、織田氏と徳川氏の連合軍が小牧長久手の戦いで武田氏を破り凱旋のおり、各地で戦勝祝いの接待を受けながら安土へ帰還するが、山崎氏も「茶屋」を建て一献献上したとの記述があり、近江の在地武士団の中では有力になっていたことがうかがえる。

山崎氏が文献に登場するのは数少なく、山崎源太左衛門賢家は前述した「信長公記」等に散見されるだけであり、元は佐々木六角氏の家臣というが、弱小の在地土豪であるため浅井氏に仕え、姉川の戦いの後、信長に下りその家臣となった。信長の西国攻めのおりには安土城の留守役として安土城を守っていたが、「本能寺の変」の後には明智光秀方に荷担し、その後秀吉の家臣として摂津三田城主になるという、はなはだ戦国時代的な生き方をしたことが知らている。しかし、山崎氏は近江の国の守護大名である六角氏の家臣時代には「佐々木南朝諸士帳」等の文献ではその名が散見されるだけで、信長の時代になってから文献に再々でてくるのである。佐々木氏関係の文献にその名があまり見られないことは、山崎氏が本来弱小な土豪であったことを考えさせる。

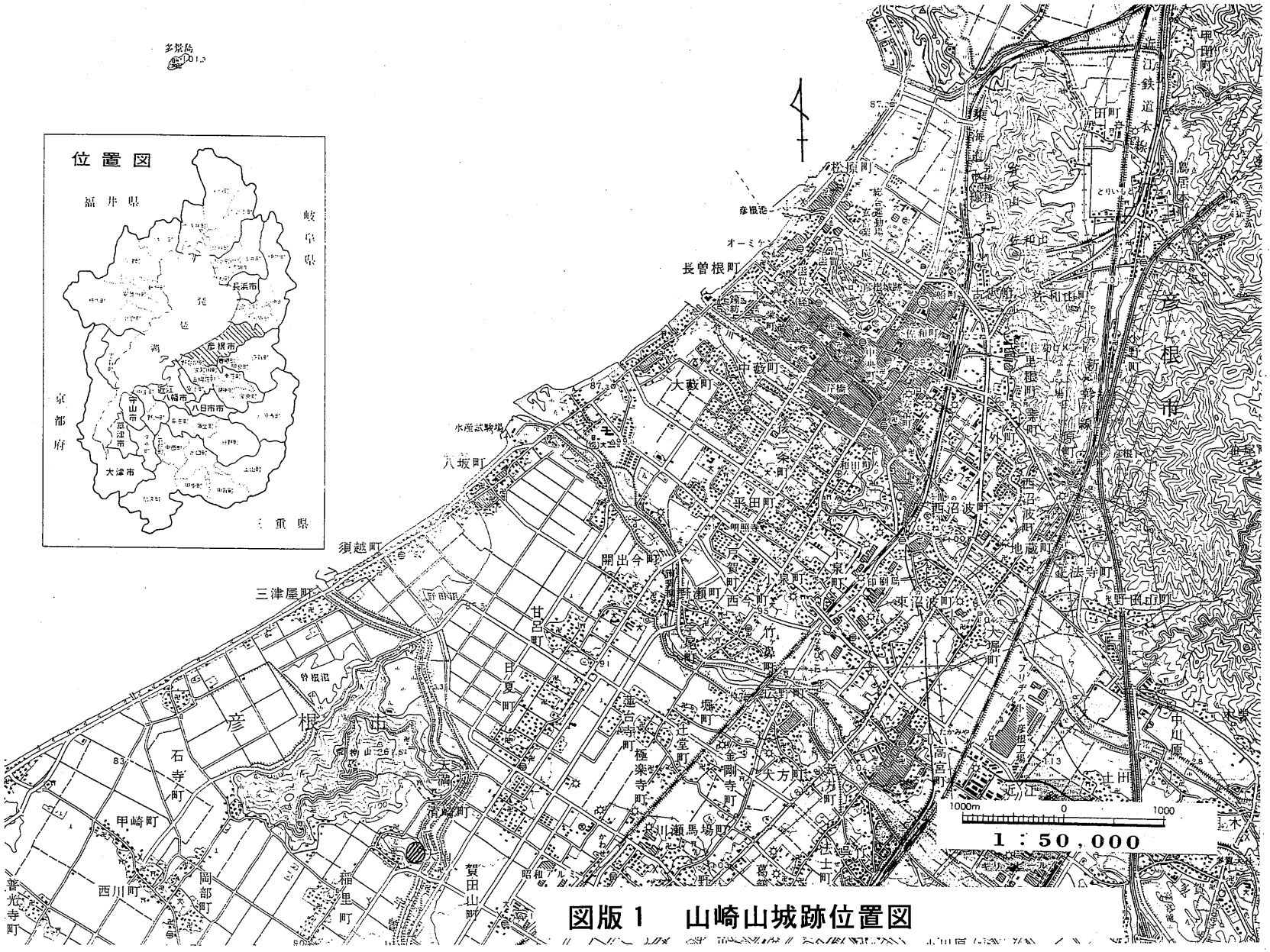
山崎山城跡は、遺構の状態や遺物の出土状況から長期にわたって営まれた城郭とは考えられず、ごく短期間だけ存続したものであると考えられる。また、城郭に石垣を使う技法が普遍化するのは、合戦に鉄砲が登場してからといわれ、「裏込め」の存在とあいまって、山崎山城跡の築城が戦国時代でも最終末に近いことがわかり、秀吉の山崎氏の摂津三田移封を考え併せれば、調査結果が文献と比較的合致するのではないかと考えられる。

報告書抄録

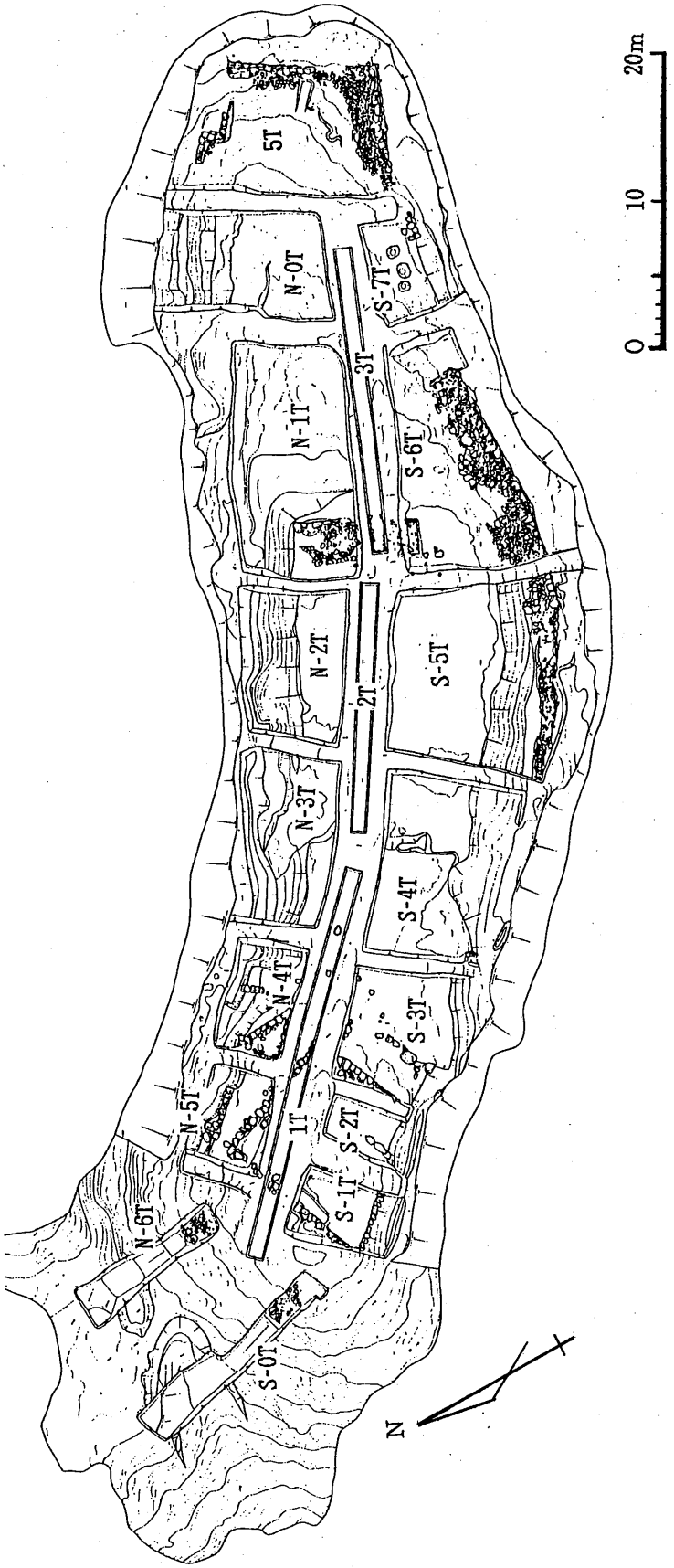
ふりがな	やまざきやまじょうせき
遺跡名	山崎山城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２７集
編著者名	
編集機関	彦根市教育委員会
所在地	〒522　彦根市元町４番２号
発行年月日	平成７年３月３１日

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山崎山城跡	彦根市稲里町字古城他	２５２０２	―	35°13′30′	130°12′	19930301～19930331 19930804～19931227 19940601～19940812	約2,000㎡	配水池設置計画

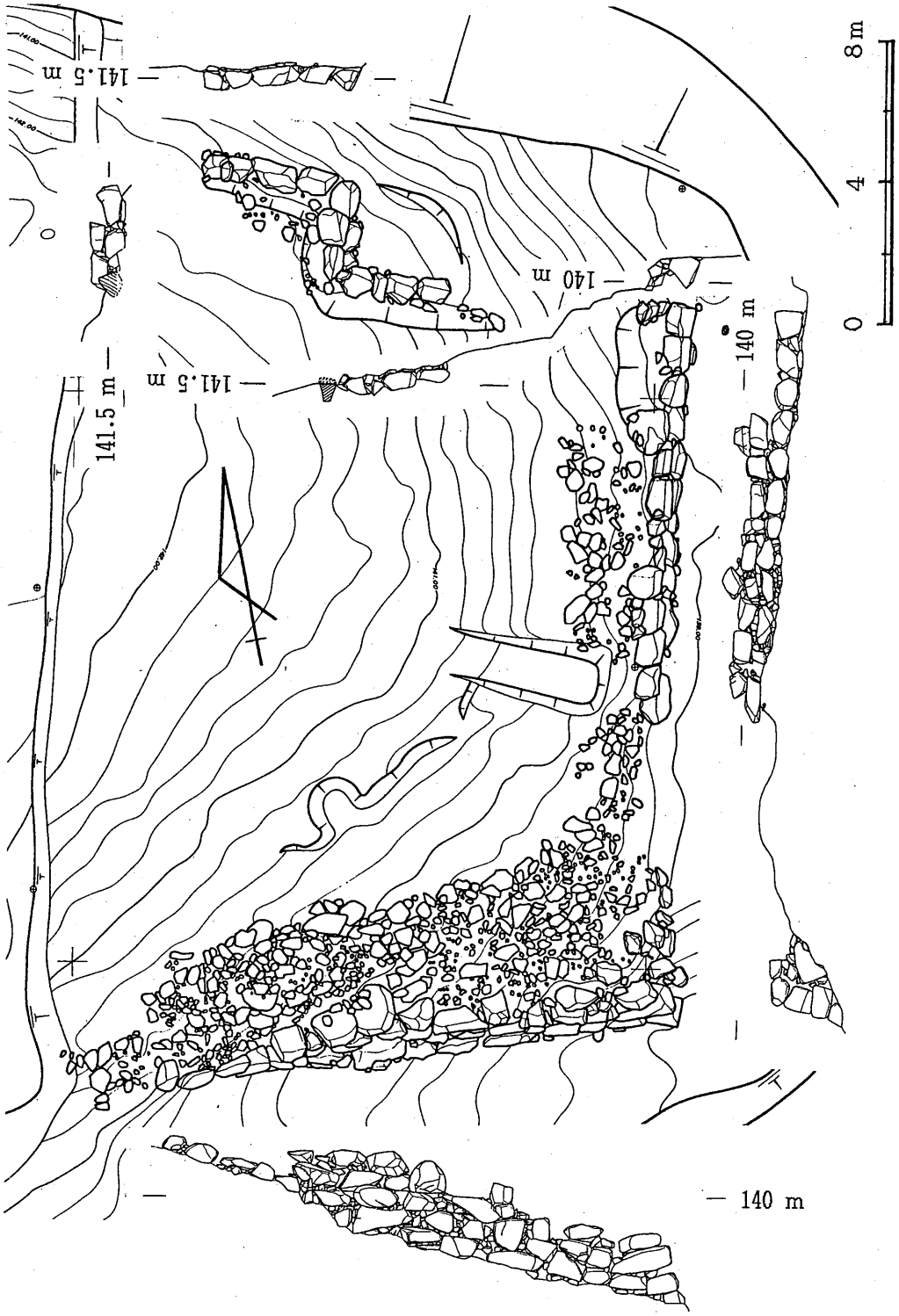
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎山城跡	城館跡	中世	石垣 竪堀　2 敷石遺構　1	土師質小皿他	連郭式山城



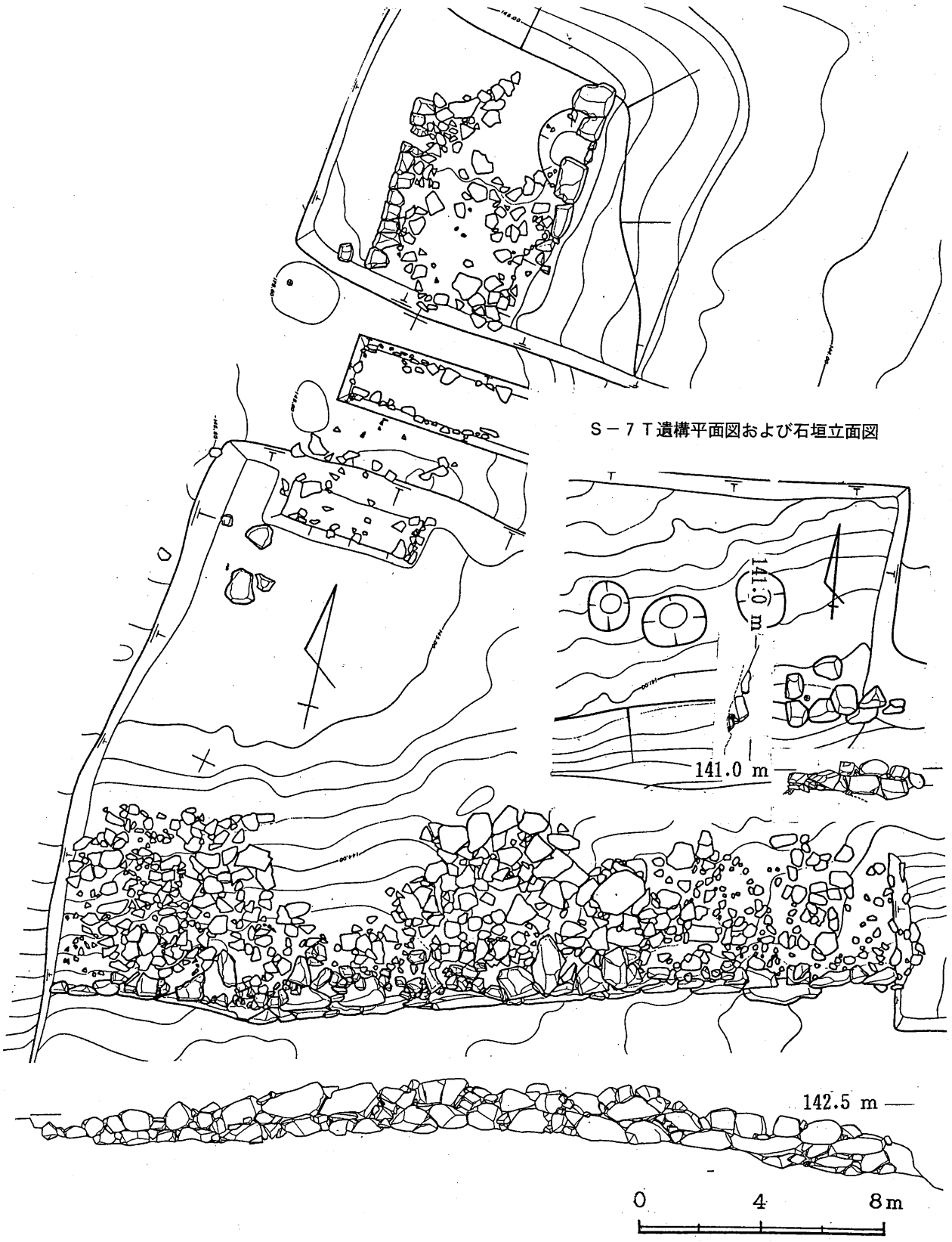
図版１　山崎山城跡位置図



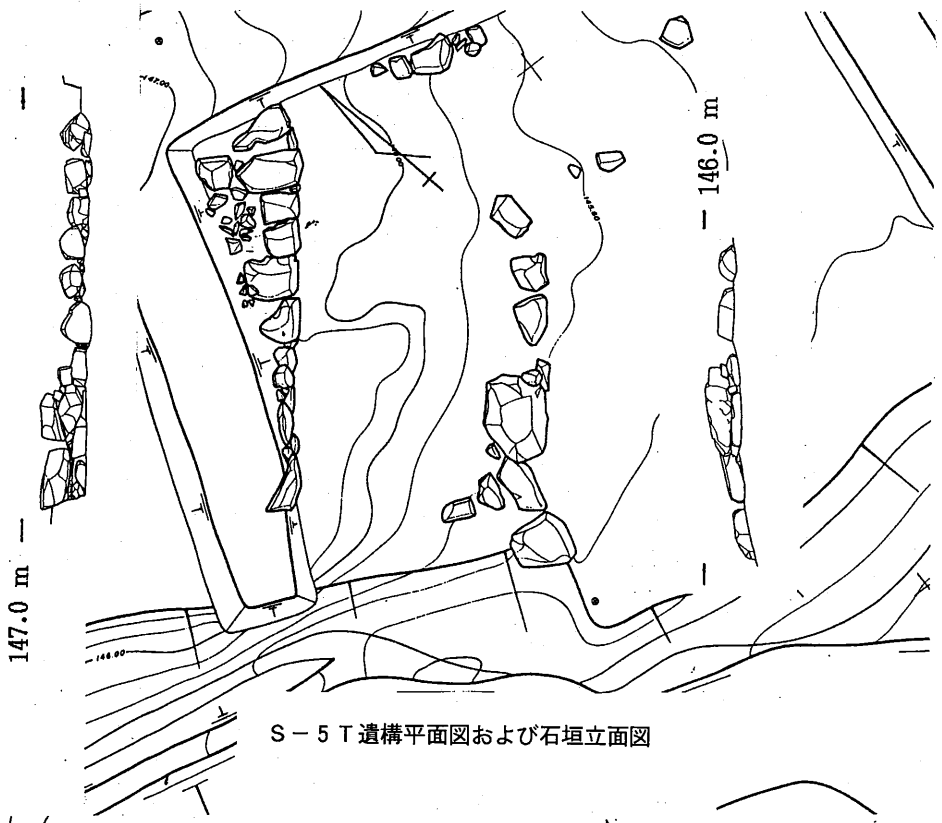
図版２　山崎山城跡トレンチ配置図



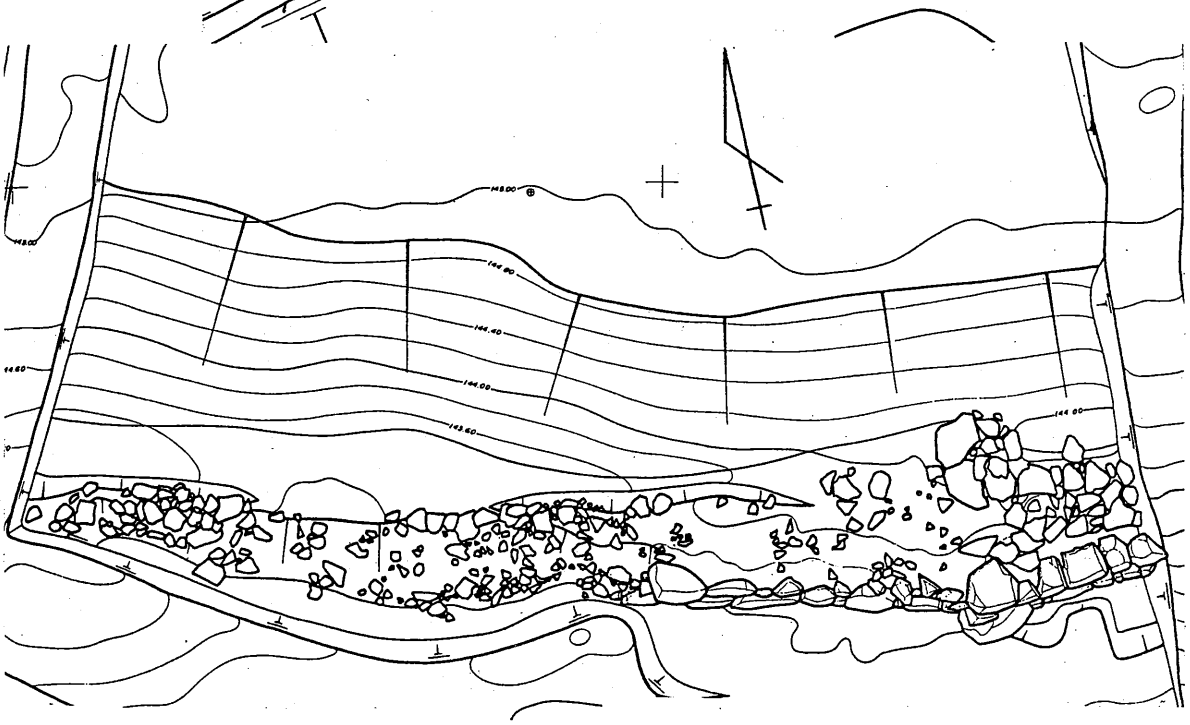
図版３　５Ｔ遺構平面図および石垣立面図



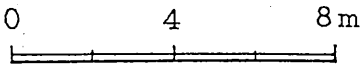
図版4　S－6・N－1T遺構平面図および石垣立面図



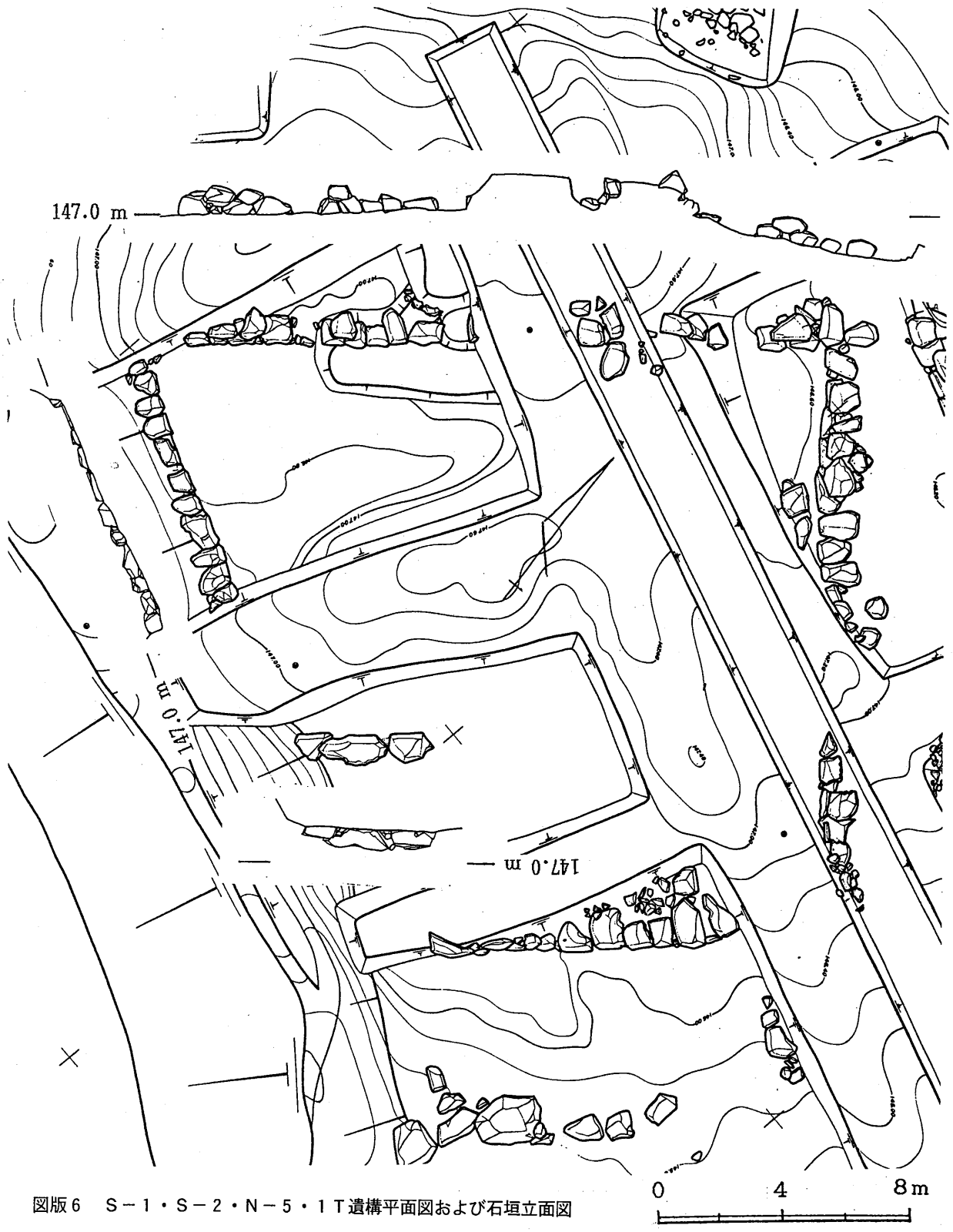
S－5Ｔ遺構平面図および石垣立面図



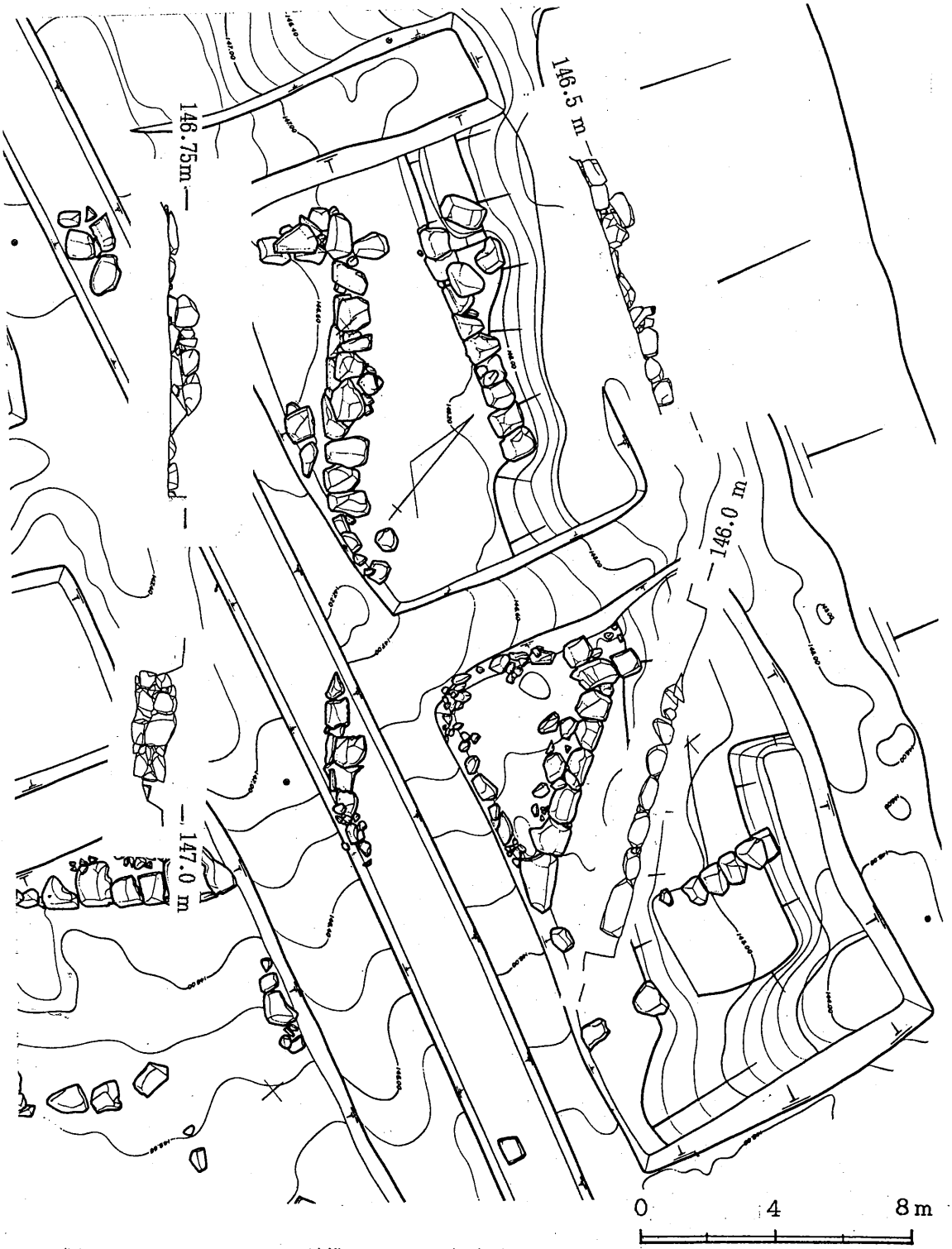
S－3Ｔ遺構平面図および石垣立面図



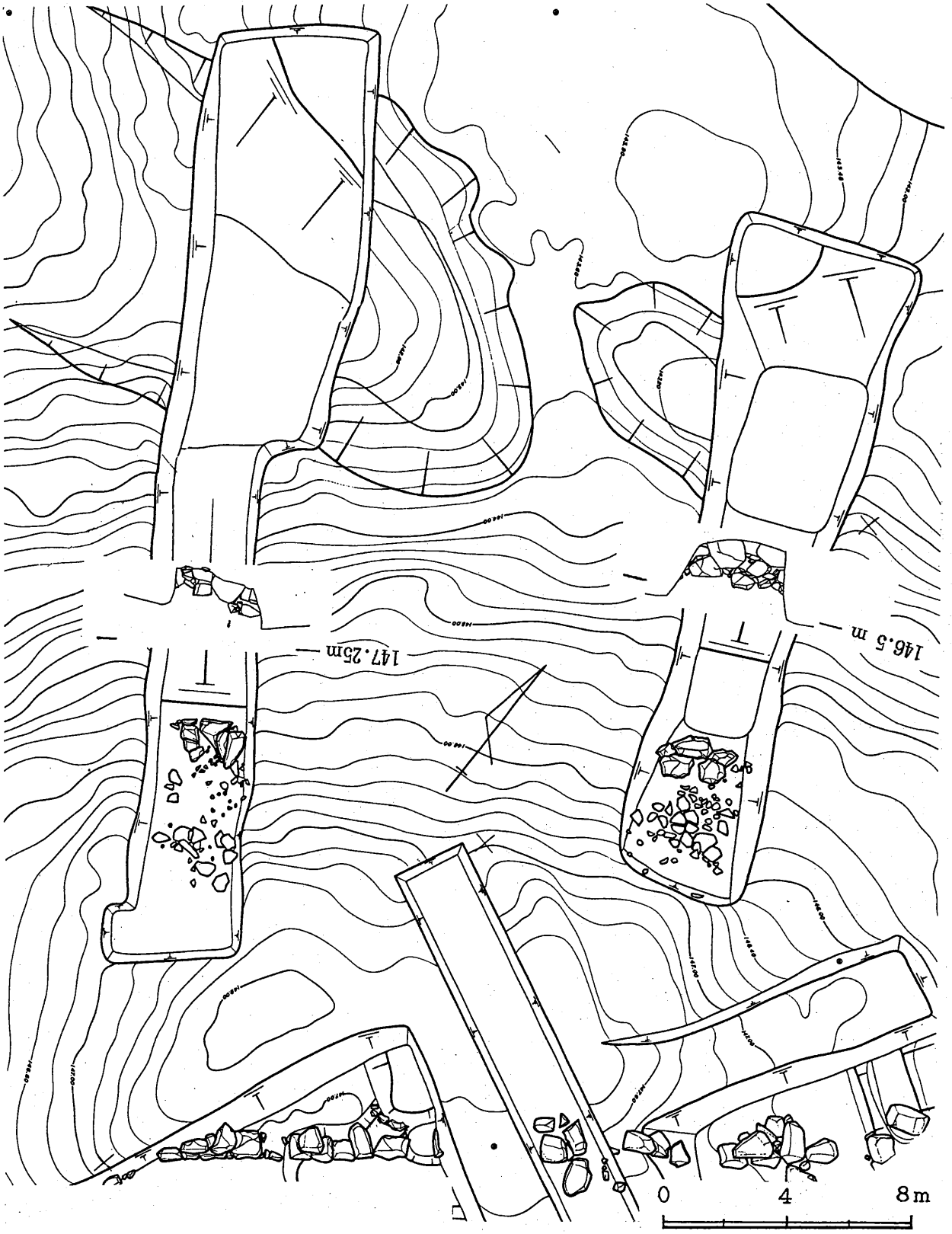
図版5



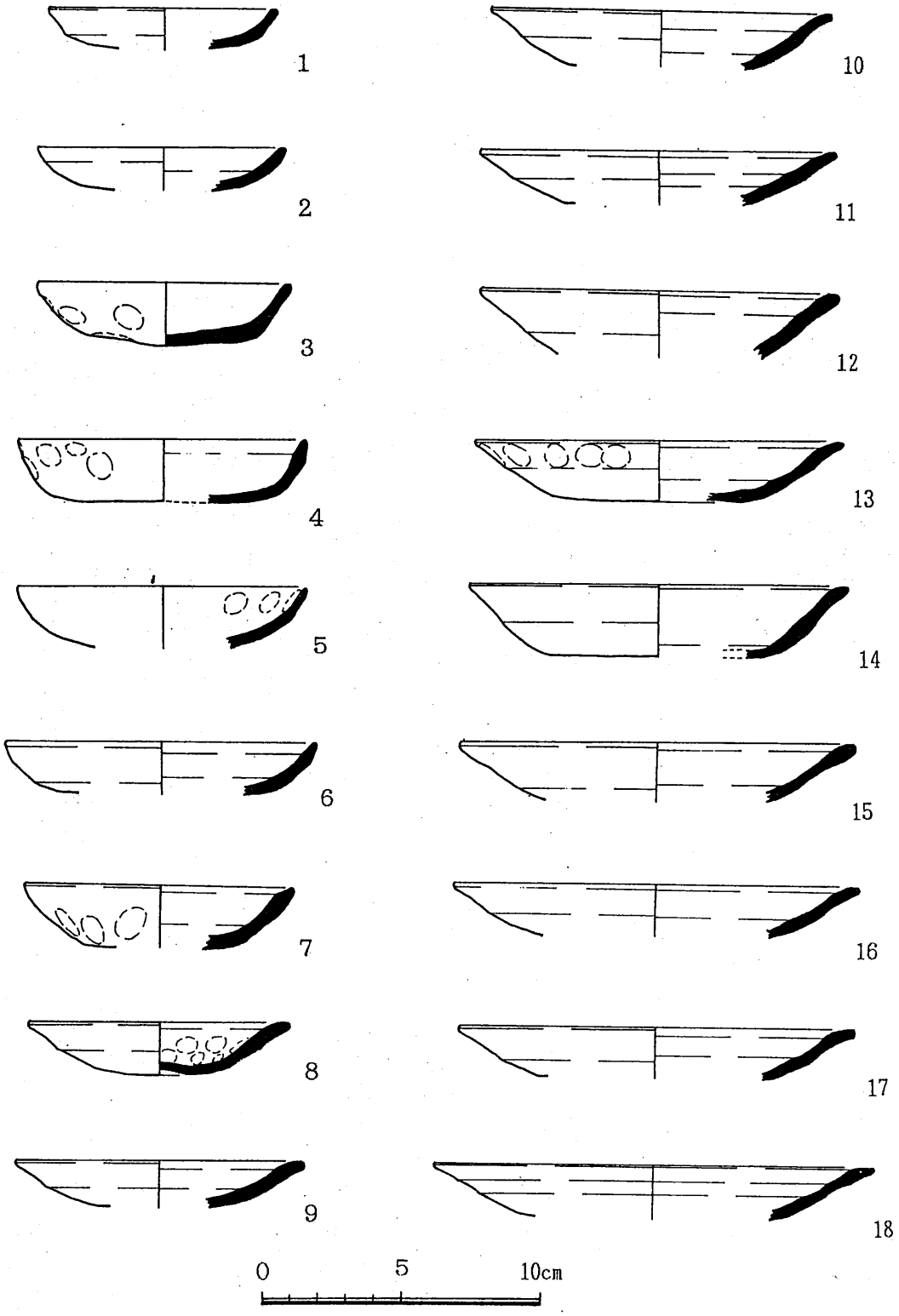
図版6　S－1・S－2・N－5・1T遺構平面図および石垣立面図



図版７　Ｎ－４・Ｎ－５・１Ｔ遺構平面図および石垣立面図



図版８　Ｓ－０・Ｎ－６Ｔ遺構平面図および石垣立面図



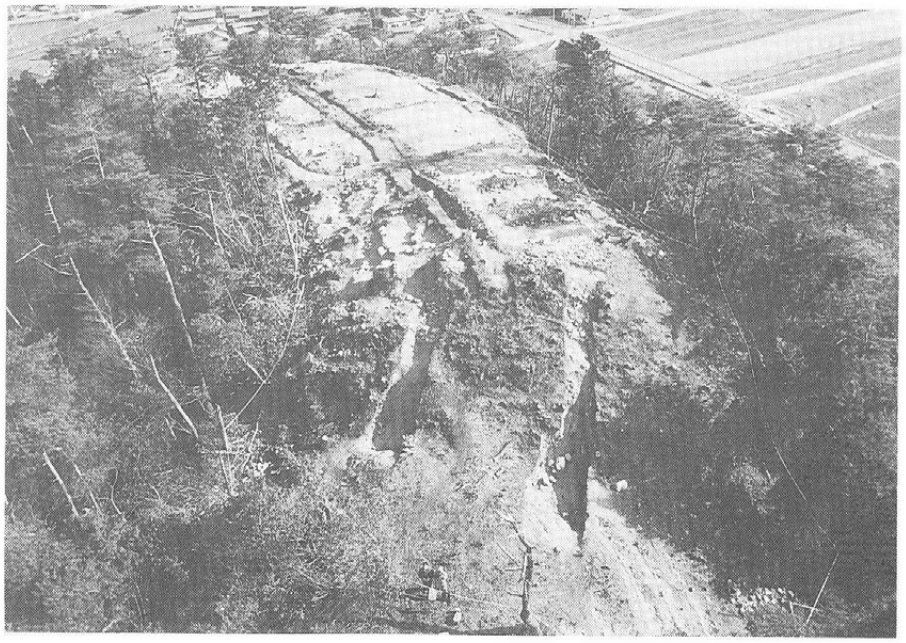
図版９　Ｎ－０区包含層出土遺物実測図

山崎山遠景（南から）

山崎山から東南を望む

写真図板 1

山崎山城跡（西から）



山崎山城跡全景（東から）

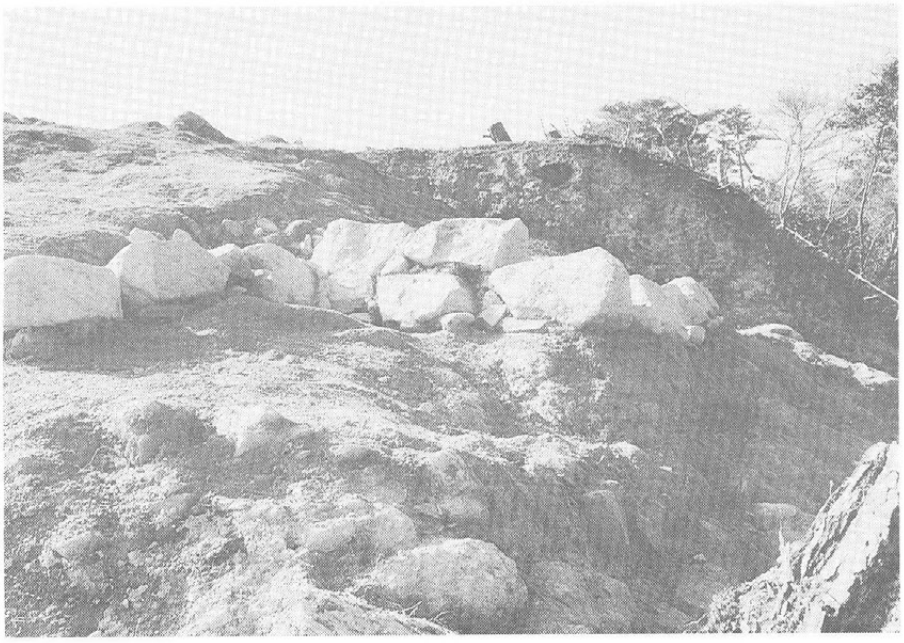
写真図板 2

第３郭全景

第３郭全景（東南から）

写真図板３

5 T 石垣南隅部分



5 T 石垣北側部分

写真図板 4

第 2 郭と第 3 郭を分ける敷石遺構

南斜面石垣

写真図板 5

第１郭全景

堅堀全景

写真図版６